

ファジョーリ&バルトリ、 最高の「スターバト・マーテル」

11月22日、聖チエリーリア殉教の日にチエリーリア・バルトリとフランコ・ファジョーリの「夢の共演」(シヤンルカ・カプア)ノ指揮モナコ大公憲兵音楽隊)を聴いた。ザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭では其演済みだが、チユーリヒで聴けるのはホツホウリ・コンサート企画のお陰だ。ルツェルン音楽祭では別のカウンターテナーとの共演を聴いたが、バルトリが、珍しく集中するまでに時間を要していた。今回も前半にはヴィヴァルディを置いたプログラム。ファジョーリが「ニシ・ドミヌス」で深いドラマ性と内的静寂の両方を聴かせ、バルトリは「グロリア」から「ドミネ・デウス」とヘンデル《聖セシリアの日のための頌歌》を、オーボエと歌った。アレツサンドロ・マルチェッロ「オーボエ協奏曲」を挟んで、「スターバト・マーテル」では冒頭から匠の技を聴かせる二人。ファジョーリの歌う旋律には常にドラマが感じられ、充実した低音と大きいフレージング、ため息のような息遣いや官能的ですらある人間的な描写で聴衆を惹きつけた。それに共鳴してバルトリも底力を発揮し、最高レヴェルな演奏となった。

ルツェルン音楽祭の第1回 「Forward」

ルツェルン音楽祭が秋のピアノ・フェスティヴァルの代わりに立ち上げた現代音楽フェスティヴァル「Forward」が、11月19日から3日間催された。20日に所見したが、まず「one to one」というパフォー

マンスに招かれた。暗い部屋に入るとパフォーマー、ウイニー・フアンのかい椅子がある。座って彼女を見つめると、2度ほど目を閉じるように促された気がして、目をつぶる。ギシギシという音が聴こえて目を開けると彼女の指の音だった。膝の上の両手指をギシギシと開いたり絡ませたり、足を逆に交差させたり、物音に驚くような仕草やさまざまな感情を表しているような目をするが不可解。そのうち出口を示されたがカーテンを開けてもドアがなく、少し離れた場所が出口で狐につままれたような不快感を覚えた。

次の美術館コンサートは、折りたたみ椅子



「夢の共演」となったバルトリ(左)とファジョーリ ©中東生

子を渡され、さまざまな作品の前で即興演奏する7人の奏者を追いかけるが、ミヒヤエル・ヘフリガー総裁夫婦やプレジデンのマルクス・ホングラー氏、「Forward」責任者のフェリックス・ヘーリ夫妻、プレス関係者と聴衆がいつしよに一期一会な体験を共有した。

大ホールではマリアーノ・キアツキアリ1ニ指揮ルツェルン音楽祭現代曲オーケストラ(LFCO)の演奏会が2プログラム披露されたが、開演前には毎回ロビーで、前述のウイニー・フアンが作り上げたパフォーマンスを十数人が観せ、観客に一体感を与えた。1回目の演奏会は「水/自然」

ゲザ・アンダ生誕100周年 記念ピアノマラソン

者がホール中を走り回ったりしながら弾く、楽しい曲だった。翌日も、もりだくさんなプログラムで、この音楽祭からは「敬遠されがちな現代音楽は音を楽しむことから始まり、参加していつしよに作り上げられる長所がある」というメッセージが感じられる。プーレーズが創設したルツェルン音楽祭現代音楽アカデミーの、約1300人の卒業生を軸に、これからの発展が期待される。

をテーマに、水との記憶が複数の言語で語られてから始まるアナア・ロツクウッドの《Water and Memory》、譜面を指して演奏を即興的に決めていくジョージ・ルイスの《Artificial Life 2007》、プラスチック問題などを取り上げるリザ・リムの《Extinction Events and Dawn Chorus》が演奏された。2回目のテーマは《暗闇から光へ》で、ボリス・オリウエーロの《Out of the Dark》、ルイス・フェルナンド・アメイヤの《Tinta Roja Tinta Negra》、ホセ・ルイス・フルタードの《Retour》(世界初演)、当音楽祭がジェシー・コックスに委嘱した《Alongside a Choruns of Voices》。ホール上に吊るされたカウベルが鳴ったり、奏

ハンガリー生まれのゲザ・アンダは、日本でもその収集美術品にファンの多いエミール・ビュレの義理の息子としてスイスで生を終え、彼の名を冠したコンクールが3年ごとに当地で開催されている。10月にオープンしたチユーリヒ美術館別館の最上階にビュレ・コレクシオンも移されたが、そこで18時から7時間、現在までのコンクール優勝者たち9人がアンダの誕生日を祝った。1982年のハイドルン・ホルトマン、2000年のフィリップ・ガンバ、1988年のコンスタンツェ・アイクホルスト、2021年の第2位ジュリアン・トレヴェリアン、2009年のサンゲジン・リ、2021年のアンダ夫人賞ギオルギイ・ギガシユヴィリ、2006年のセルゲイ・クドリャコフ、そして2018年のクレア・ファンチ、最後にアンダの弟子だった初回優勝者のジョルジュ・プリュデルマシエが、アンダに学んだという《ディアベツリ変奏曲》を弾いて亡き師を偲んだ。